

# St. Luke's International University Repository

## Integration Unit-Effective Teaching-Learning Method.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, シュン, 岩井, 郁子, 竹内, 敏子, 木下, 幸代, 丹野, はるみ, 黒江, ゆり子, 船津, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/98">http://hdl.handle.net/10285/98</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 成人看護学におけるインテグレーション ユニットの試みについて

高橋 シュン   岩井 郁子   竹内 敏子  
木下 幸代   丹野はるみ   黒江ゆり子  
橋津 裕子

## はじめに

看護学は関連諸科学の知識や技術を応用する実践の科学である。看護基礎教育において、各单元ごとの概念や原理・法則などの基本的な理論を教授する講義方法のみでは教育目標を達成することは難しく限界がある。また、各看護学の講義の直後に受持患者を中心とした臨床実習を展開しても、既習の理論を実践の場への統合・応用の方法を習得できていない場合には十分な学習効果を期待することは難しい。

このようなことから、成人看護学における目標を達成するうえで教授内容はいうまでもないが、既習の知識を統合し、実践活動へ応用するための効果的な教授—学習方法を工夫することは教育活動上重要であることを経験した。

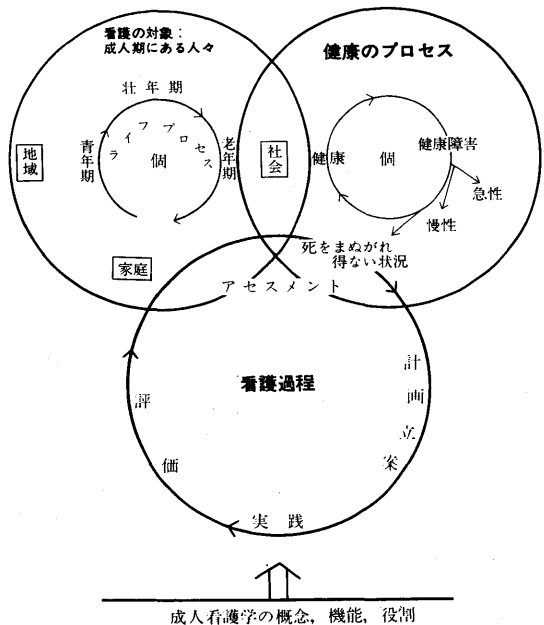
聖路加看護大学紀要第2号に掲載した「成人看護学における病棟演習についての一考察にひきつづき、今回は臨床実習に入る前段階として既習の知識の統合と実践への応用、および系統的な問題解決的接近法を学習するために設けたインテグレーションユニットに焦点をあて、成人看護学の授業展開を報告したいと思う。

聖路加看護大学では、昭和50年度から、看護学部学士課程のカリキュラム計画を改善するためのプロジェクト活動が行われ、大学の教育方針、看護教育教科構造等が討議され、さらに担当部門に分かれて一般教授目標 (G.I.O, General Instructional Objectives)、個別行動目標 (S.B.O, Specific Behavioral Objectives) を作成した。

目標設定に先立ち、成人看護学教師間で成人看護学の概念、および構成要素について話し合い、その構造を図1に示したように組み立てた。これらの3つの領域を構築する各要素を分析し、成人看護学の教授目標および、ユニット(単元)を設定した。成人看護学の一般教授目標を達成するための各ユニット、サブユニットの展開は、継続、相関、統合を考慮し、学習の転移が効果的になされるように考えた。

また、目標を達成するためには、講義による理論の教授のみでは実際の看護場面で問題解決技法を応用し

図1 成人看護学の構造



て、患者の看護問題を解決する技術を身につけることは難しいと考え、従来演習として試みてきた①患者理解のための病棟演習に② Written patient を中心としたゼミナール、③看護過程を応用し、実践するための病棟演習を加え、インテグレーションというユニットを設け、理論と実践との間に位置づけた。

## I 成人看護学の概要

聖路加看護大学の専門教育科目の進度は表1に示すとおりであり、成人看護学は、1年次の看護学原理、一般教育科目、基礎教育科目(解剖学、生理学等)に続いて、2年次に21単位(うち臨床実習4単位)が組まれている。

成人看護学では、成人各期にある人の発達段階の特徴、発達課題、健康に影響する環境の諸因子、疾病等を学習し、個人とその家族の健康問題の解決に必要な看護の方法論と基本的な実践能力を獲得することに重

表1 専門教育の進度

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年
	一般教育科目, 基礎教育科目を主として広範な科学に接し人間形成を助ける			
	看護学原理	成人看護学・理論と実習  (成人—	母性・小児, 精神科各看護領域の理論と実習  →母性・小児——	教職課程・助産課程(選択)看護管理・教育, 卒業看護研究・公衆衛生看護 →地域社会)

近藤 潤子, 看護教育カリキュラム計画——聖路加看護大学の場合——  
医学教育 (1976年6月) 7:3 p214

点をおいている。

科目全体のねらいと一般教授目標(G.I.O.)は以下のとおりである。

### ねらい

あらゆる環境とかかわりあって生活している成人期にある人々を身体的, 心理的, 社会的側面を含む統合的な存在として認識し, 個人および家族の健康の保持, 増進, また疾病のさまざまな状況にある人に対し, 適切な看護ができるための知識, 技術, 態度を養う。

### 一般教授目標 (G.I.O)

1. あらゆる環境とかかわりあって生活している成人各期にある人の成長, 発達および発達課題を理解し, 看護に応用する能力を養う。
2. 成人各期にある人の健康に影響を与える諸要因を理解し, 保健の重要性を認識する。
3. 既習の関連科目の知識を土台として, 成人期における疾病の総合理解をはかり, 健康障害をもった人の看護をおこなうための基礎的知識を修得する。
4. 成人期にある人の看護問題の判別, 解決に必要な基本的知識, 技術, 態度を養う。
5. 保健医療チームのなかの一員としての役割を認識する。

全体の構造は図1に示したが, 授業を展開するにあたっては, 単位数も多く, めざすべき目標, あるいは教授—学習方法も多様であり, 大きく6つのユニットに分けた。すなわち, 成人看護学の全体像を示すI概論, 成人期の3つの領域の基本的知識を教授するII対象となる人々の理解, III健康と健康障害, IV看護の方法論, 理論と実践の統合をめざすVインテグレーション, VI臨床実習の6つである。各々のユニットおよびサブユニットの構成を表2に, また, 時間的割合と時期の関係を図2に示した。

これらのユニットは, バラバラなものではなく, 継続して学習が積み重ねられるように, 関連性をもった

配列と展開を考えた。この関係をあらわしたものが, 図3である。

次に各ユニットのねらいについて簡単に述べたいと思う。表3にまとめたユニットG.I.Oもあわせて見ていただきたい。

I概論は, 成人看護学の輪郭, あるいは考え方を示すユニットであり, その概念, 変遷, 意義を理解し, 成人看護の役割を認識することをめざしている。

II成人看護の対象となる人々の理解は, あらゆる環境とかかわり合うなかで, 役割や課題を達成している成人期の人々を総合的に理解するユニットである。エリクソンの発達理論を中核に, 成人期の人々が直面している課題, 発達上の危機, 家族関係, 役割, 加齢に伴う身体の諸機能の変化などを, 健康問題と関連づけて理解し, 看護の働きかけを考えるユニットである。

III健康と健康障害は, 健康を障害された人を看護するために必要な基礎的知識を習得することをめざしている。最初に健康のプロセスを位置づけ健康と病気を流動的なものとしてとらえている。疾患は各系統別に展開され, 外科系も各サブユニットの中に含んでいる。また, 一年次で学習した解剖学, 生理学, 微生物学, 生化学など基礎科目で学習した知識を有効に活用し, 正常な構造と機能, 病態との関連性を有機的に理解できるように, 各サブユニットごとに自己学習の教材として, ワークブックが準備されている。

IV看護の方法論は, 成人看護の実践のために必要な基礎的理論と技術を理解するユニットである。

看護は, 対象となる人と, 看護婦との人間関係を基盤に成立するということ, 看護の働きかけのなかで, 重要な意味をもつのは教育的なアプローチであるということ, また, 健康問題に対し, 系統的な接近をするうえで必要な技術である問題解決技法を応用した看護過程を, 3つの基礎的な理論としてここに含めている。

ユニットI～IVまでの概略を述べたが, ここまでが, 成人看護を行なううえでの基礎理論である。それにひ

図2 各ユニットの時期と時間数

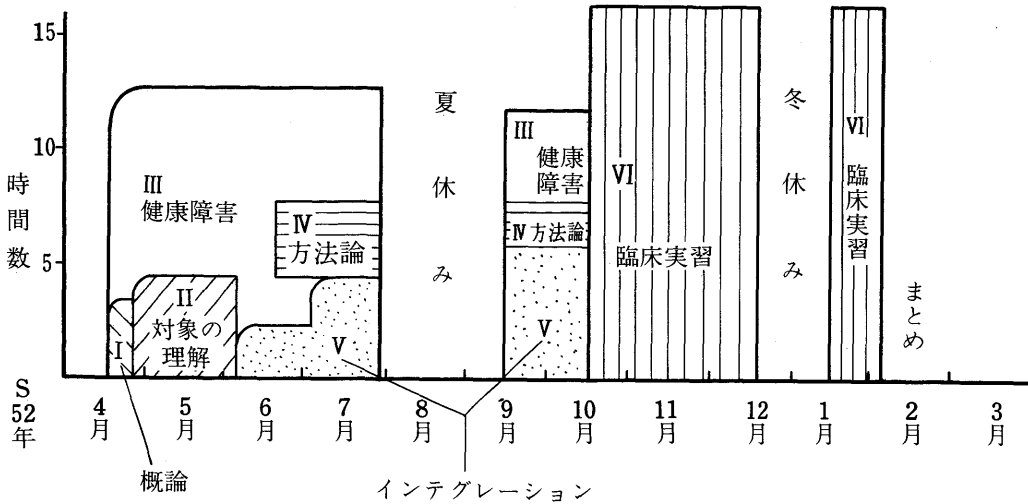


表2 各ユニットの一般教授目標 (G I O)

ユ ニ ッ ト	ユ ニ ッ ト G. I. O.
I 成人看護学概論	成人看護学の概念・変遷・意義を理解し、成人看護の役割を認識する。
II 成人看護の対象となる人々の理解	成人期にある人々の成長、発達、発達課題を理解し、看護に応用できる基礎を養う。
III 健康と健康障害	1. 健康を個人と環境との活動的な関わりからとらえ、成人期にある人の健康に影響を与える諸要因を理解する。 2. 既習の関連科目の知識を土台として、成人期における疾病の病態生理・診断・治療の理解をはかり健康障害をもった成人期にある人の看護をおこなうための基礎的知識を習得する。
IV 看護の方法論	看護の実践のために必要な人間関係、教育技法、及び看護過程の基礎的理論と技術を修得する。
V インテグレーション	健康障害をもった成人期にある人の問題を、既習の一般理論を用いて明確にし、問題解決する過程を学ぶ。
VI 臨床実習	1. 疾病をもつ成人の看護上の問題を判別し、個別化した看護の計画をたて、実践し、評価する能力を修得する。 2. 患者及び家族に対し、適切な健康教育が行なえる能力を養う。 3. 総合医療における医療従事者の相互関係とそこにおける看護婦の役割を認識する。

き続き、理論をどのように統合し応用するかを学ぶユニットとして、インテグレーションが位置づけられ、最後に理論、技術を検証し、個別的な問題解決への援助を中心とした臨床実習が組まれている。

## II 成人看護学におけるインテグレーションユニットについて

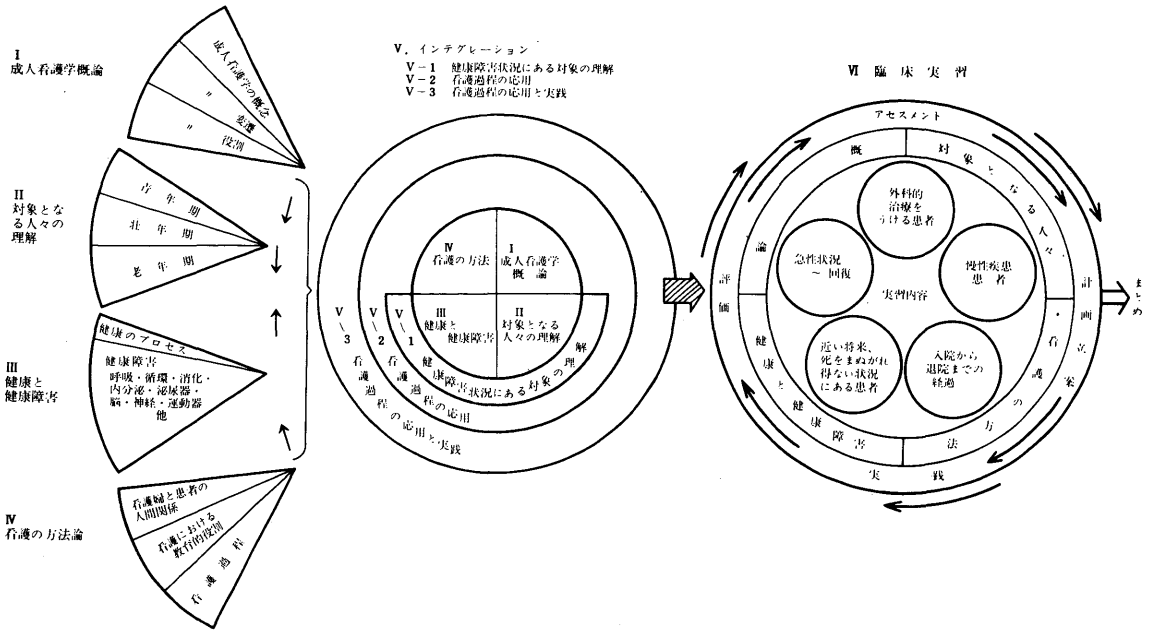
### 1. インテグレーションユニットのめざすもの

先にも述べたように、成人看護学の一般教授目標を達成するためには、全体の構成、および各ユニットの

教授目標、教授内容、教授方法を総合的に検討し教育計画が立案されねばならない。

成人看護学の中核的な教授目標は、成人期にある人および家族の看護問題を判別し、系統的な問題解決への援助活動が実践できることである。これらの目標を達成するために、ユニットI～IVまでの基礎理論や一般原則論を中心とした学習のみでは、目標を達成することは困難である。問題状況を解決するための系統的な思考過程は、一般理論や原則論、体験等を基盤に、知識を統合・応用し、抽象化・判断・推理という思考

図3 成人看護学の展開



が要求される。すなわち問題を認識し、問題を云いかえる能力、又問題を解決するために知識や技術・経験を再統合し、系統的に企画する能力も要求される。

従来は基礎理論、一般原則論の教授の後に臨床実習を位置づけ、成人看護学を展開していたが、動的応用的な臨床の場において、既習の基礎理論を個別的な看護問題の発見や解決の為の援助活動へ効果的に統合し、応用するには、学生の能力の差や指導体制上の問題もかさなり限界があった。また臨床実習は単に看護問題の判別や解決のための計画の立案の過程を学ぶのみでなく、実践を通し看護問題解決のための計画が妥当であったかどうかを検証することや基本的な援助技術を習熟することも重要である。

このようなことから、一般理論、原則論の学習の後に、既習の知識を統合・応用し、系統的に問題を解決してゆく思考過程と、問題解決に必要な理論の再獲得をめざす試みとしてインテグレーションをもうけた。

云いかえるならば成人看護学の目標行動を達成するための学習経験として企画されたユニットである。

## 2. インテグレーションユニットの目標および構成

このユニット全体の一般教授目標は、健康障害をもった成人期にある人の看護問題を既習の一般理論を用いて明確にし、系統的に解決する過程を学ぶことであり、段階的にステップをふんで理論の統合と応用の範囲を広げるように企画されている。

またこのユニットに共通している教授—学習方法は問題状況の提示による、Problem-Based-Learnig<sup>(註1)</sup> (問題指向型学習)である。

サブユニットの1は「健康障害をもった成人期にある人の理解」であり、ユニットII成人期にある人々の理解、ユニットIII健康と健康障害についての学習が終了した後で行なわれる。病棟に出て、実際に患者を受け持ち、一般理論と実際の患者との比較により、類似点や違いを明らかにし、知識を整理、分類しながら理論をより確実なものへと強化することをめざしている。

サブユニットの2は「看護過程の応用」である。基礎理論の学習が進み、ユニットIVの看護の方法に関する一般理論を学習した後に開始され既習の理論を統合・応用し、問題状況を解決してゆく思考過程を主体的に学ぶサブユニットである。

ここでは紙上患者 (Written Patient<sup>(註2)</sup>) を中心に、学生主体のゼミナール形式で進められ、問題状況の認識、情報の解釈・分析・統合により看護問題の判別、看護問題の表現、解決目標の設定、解決策の立案を中心に、知識や体験を再統合し、体系化し、既習の理論を看護過程へ応用する能力を育成することをめざしている。

このサブユニットが終了すると次のステップである「看護過程の応用と実践」が開始される。ここでは、実際の患者を受け持ち、看護過程の技法を用いて患者

の care を実践する。

各理論および理論と実践との継続・相関・統合を考慮した成人看護学の教育計画のなかで、インテグレーションユニットは、目標達成の上で重要な意義をもつものである。このユニットの終了後に臨床実習が開始される。

次に今まで述べたインテグレーションを構成するサブユニットの具体的な展開を述べてみたい。

### 3. 健康障害をもった成人期にある人の理解 (V-1)

このサブユニットは先にも述べたように I 成人看護学概論, II 対象となる人々の理解, 又, III 健康と健康障害の殆んどが終了した 6 月末から 7 月にかけて行なわれる。

このサブユニットでは、既習の知識を基礎に、病状状況にある患者の理解を深めることを主なねらいとしている。一般教授目標、個別行動目標は以下のとおりである。

#### G. I. O. 疾患をもった患者のニーズと問題を認識する。

##### S.B.O. 1 成人の発達段階の理解

1) 発達段階の一般理論と比較して、その人の社会的役割を記述できる。

2) 健康障害によって、発達課題の達成がどのように影響されているかを記述できる。

##### S.B.O. 2 疾病の理解

1) 正常な機能と比較して、どのような機能障害が起っているのかを記述できる。

2) 疾病の病態生理、症状、検査、予後を記述できる。

3) 上記1)と2)から、看護をするうえでの観察ポイントを記述できる。

S.B.O. 3 受持ち患者についての看護の必要性を考察し、記述できる。

**展開方法** 学生は、7～8名のグループに分かれ、各グループごとにインストラクターが1名付く。内科、外科病棟において、患者1名を学生1～2名で受持ち、看護の実践（特に生活の援助を中心に）を通して目標を達成する。病棟演習時間は1回4時間であるが、必要時学生は自主的に病棟へ出ている。演習は内科2回、外科2回の計4回行われ、学生の経験が偏らないように、患者を選択している。

**具体的な演習のすすめ方** 学生は演習数日前に、インストラクターより受持つ患者の氏名、年齢、性別、疾患名、治療内容などの説明をうけ、これらの情報をもとに、目標達成のために作成された記録用紙に、指示された学習項目にそって自己学習し、病棟演習に臨む。

次に、実際に患者を看護し、患者、または看護婦や医師、記録類から患者についての情報を集め、演習前に自己学習を行った一般理論と比較し、受持ち患者の病態生理、検査、治療、病気によって生ずる基本的ニーズの障害や、今後の問題、さらに看護の原則（患者が望ましいゴールに到達するための看護婦による援助）やこの患者についての看護の必要性について考察し、記載する。その記載された用紙を各自がインストラクターに提出し、次回の演習までに、個別指導を受ける。

**健康障害をもった成人期の人の理解—病棟演習にたいする学生の反応<sup>(\*)</sup>表3参照**

表3 学生の意識調査の結果

		ユニット I～IIIの平均	ユニットV：インテグレーション	
			健康障害状況にある対象の理解	看護過程の応用
時間数	少ない	35.5%	17.0	82.5
	丁度よい	50.3	76.0	0
S. B. O. の明示が役立った		81.6	68.0	—
S. B. O. の達成度	達成できた	12.2	17.0	—
	ほぼできた	71.5	59.0	
	達成できない	18.2	10.0 (無回答6人)	
教授法について	良かった	58.0	63.0	—
	悪かった	13.0	2.0	
	どちらともいえない	29.0	27.0	
課題の量	多い	17.3	32.0	—
	少ない	3.3	5.0	
	丁度よい	74.3	59.0	

時間数については「丁度よい」という回答が76%であり、講義やゼミナールが一般に時間数の不足を訴えているのに比べると、高い数値を示している。G.I.O., S.B.O. の明示が役立ったか否かについては68%が「役立った」としているが、講義の平均81.6%に比べ低い。これは、演習用紙を配布し、具体的な学習内容を指示したため、G.I.O., S.B.O. を意図的に活用しないものも多かったということも考えられる。G.I.O., S.B.O. の達成感については、講義と比較し大差はないが、この項目に回答なしが6名いた。尚「達成した」は17%であり「ほぼ達成できた」と答えたものは59%である。学習方法については「よかった」と答えたものが63%で講義の平均58%よりやや多い。「悪かった」との回答は2%にすぎず、講義の平均13%よりも明らかに少い。課題の量については「多い」と答えたものが、講義の平均の約2倍(32%)を占め自己学習として負担となっている傾向もみられるが、「少ない」と答えたものも講義の平均よりやや多く、積極的な姿勢もみられる。

#### 4. 看護過程の応用 (V-2)

サブユニットとしての「看護過程の応用」は、成人看護学の基礎理論であるユニットのI~IVの学習が終了した後以下に以下の目標を中心に展開される。

##### G. I. O

成人期にある人の看護問題の判別、および問題解決への援助を行うために既習の知識を統合し、応用する能力を養う。

##### 教授-学習方法について

このサブユニットで、何を意図しているかについては先に概略を述べた。すなわち、特徴的な健康問題状況を中心テーマに、ありのままの問題状況を提示したWritten Patientを教材に、情報の解釈、分析をし、看護問題の判別、問題解決のための計画立案を中心とした看護過程の理論を応用することが、主なねらいである。

問題をどのように解決してゆくかを、学生の主体的な活動を中心としたグループ学習、ゼミナール形式をとりいれて展開し、自己学習の学習態度を形成してゆく教授方法をとりいれている。

テーマの数によってグループ編成は異なるが、昭和52年度は4テーマで実施し、4グループに分けられた。各グループは11名の学生から成り、各テーマごとに1人の教師が参加した。

テーマは、青年期、壮年期、老年期の人々を中心に、性役割の特徴も考慮し、対象を設定することと、健康問題の特徴的な状況を提示できるものとして、急性状況を呈する疾患、慢性疾患(リハビリテーションも含める)、近い将来死をまぬがれ得ない状況、外科的治療

をうける状況を中心に、対象と状況を効果的に組合せたテーマを中心に展開することがねらいであったが、企画、担当するうえでの事情もあり、本年のテーマは、以下の通りであった。

- 1) 肝硬変症の患者の看護 (症例は58歳の男性)
- 2) 脳・神経系疾患をもつ患者の看護 (症例は80歳の男性)
- 3) 青年期にある糖尿病をもつ患者の看護 (症例は19歳の男性)
- 4) 呼吸・循環器系に障害をもつ壮年期にある患者の看護 (症例は52歳の女性)

各テーマごとに一般教授目標および個別行動目標が設定され、この目標を中心に学生は自己学習をし、ゼミナールに参加する。そして、グループ内で選出された司会者が中心となり討議を進めてゆき、教師は目標がずれないように、またゼミナールが効果的に行なわれるようにアドバイスをする立場をとった。しかし、初回のゼミナールでは、ややもすると、講義の延長のような形となった場合もあった。なお、教師は、1つのテーマを専門に担当し、学生が、各テーマを巡回する形をとっている。1テーマに5~6時間を使用し、一週間で1~1.5テーマを展開した。

**具体的な展開例-呼吸・循環器系に障害をもった壮年期にある患者の看護-**

このテーマにおける一般教授目標および個別行動目標は以下の通りである。

<テーマ> 呼吸・循環器系に障害のある患者の看護を考える。

##### G. I. O

1. すでに学習した知識を基盤に、呼吸・循環器系に障害のある壮年期にある患者の看護問題の判別および問題解決への援助を行うための看護過程を学ぶ。
2. 慢性疾患患者の教授計画立案のプロセスを学ぶ。

##### S. B. O

- 1-1 急性状況にある患者の看護方針(ゴール)を設定し、表現できる。
- 1-2 患者の状態を系統的にアセスメントし、看護問題を判別し、これらを表現できる。
- 1-3 看護問題を解決するための達成目標を設定し、行動用語として表現できる。
- 1-4 目標を達成するための解決策を列挙することができる。
- 1-5 目標を達成したかどうかを判断するための客観的な観察項目を列挙することができる。
- 2-1 保健行動上の問題を列挙することができる。

る。

- 2-2 レディネスを査定するための項目と内容を列挙することができる。
- 2-3 教授目標を設定し表現することができる。
- 2-4 Q37に関し、教授計画を立案することができる。
- 2-5 Q37の目標を達成したかどうかを判断するための評価目標を設定できる。

注 Q37 食事療法における患者の学習目標を、「塩分制限 3gの範囲内で食品を選び、食事ができる。」と設定した場合の教授計画を立案しなさい。

各テーマに共通していることは各状況に関連する既習の知識を統合・応用し、看護過程を中心に学習することである。即ち、呼吸・循環器系に障害のある患者の看護においては、概論で学習した看護の役割、機能をふまえ、成人看護の対象となる人々の理解で学んだ壮年期にある人の発達課題や社会的役割、状況危機に伴う心理的な反応などに関する一般的な理論、および健康と健康障害のユニットで学習した病態生理や診断・治療、更に看護の方法論で学習した教授-学習のプロセス、看護過程の一般的な理論等、既習の理論、原則論を統合・応用し学習をすすめてゆかなければ、このテーマにおける個別行動目標を達成することはで

きない。

### 看護過程の応用-Written Patient を中心とした学習への学生の反応

サブユニットのゼミナール形式による学習終了後、無記名のアンケート調査を行なった。その結果から学生の反応をまとめてみたい。

「個別行動目標を達成するうえでゼミナール形式での展開は効果的でしたか」という質問に対し90% (36名)の学生は「はい」と答え、「いいえ」と答えた学生は居ない。残りの10% (4名)の学生は、どちらとも云えないと答え、その理由として、友達に頼ってしまうことを挙げている。

今後ともゼミナール形式で進めた方が良いかという質問には100%(40名)の学生が、賛成している。ゼミナールを行う時期として適切であると答えた学生は85% (34名)であり、残りの学生は、もう少し早めに講義と並行して行なった方が良いと答えている。今回の4つのテーマの設定の妥当性については、87.5%(35名)の学生は「適切である」と答えているが「不適切」2.5% (1名)「どちらとも云えない」10% (4名)であり、テーマを増やしてほしいという意見もあった。Written Patient を教材にしたことに関しては、87.5%(35名)の学生が「適切である」と答え、「不適切」0%、「どちらとも云えない」17.5% (3名)無回答2.5% (1

よかった点	悪かった点	その他の意見・希望
① 実習をひかえて、今までのクラスの学習を整理できた。前期の総復習となった。 ② 今まで学習したことを、より具体的に、総括的に理解できるようになった。 ③ 看護問題の取り上げ方、表現の方法、ケアプランの立て方など明確になった。 →自分だけの考えに片よらず、他の人の意見を聞くことによってより探まった。 ④ 質問形式によってデータの読み取り方を知ることができた。 ⑤ S. O. A. P.の考え方を具体的に理解できた。 ⑥ 少人数グループで、みんなが積極的にできた。 ⑦ 学生中心でよかったし、ポイントをおさえた教師の説明があったのがよかった。 ⑧ 基礎的知識の不足を痛感した。	① テーマによって、GIO達成度にかなり差が出た。 ② 教師によってNursing processの説明が異なる点があり、まだNursing processが理解できない。 ③ 何を私達に求めているのか、インストラクターの意図が不明なゼミもあった。 ④ 脳・神経系のゼミと消化器系のゼミで、昏睡状況の患者の看護が重複していた。	① 今後も、是非このようなゼミを計画してほしい。 ② もう少し症例を増やしてほしい。 ③ 実習が始まる前に、ゼミナールを終了してほしい。 ④ 事前にGIO, SBOのオリエンテーションをしてほしい。 ⑤ 外科治療を受ける患者のゼミナールを設けてほしい。 ⑥ 学生本位のゼミだから、先生はあまり口をはさまないでほしい。



名)であった。理由としては、「データに限界があり追求できない」と答えている。

1テーマの時間(5~6時間)については、「適切」と答えた学生は15%(6名)、「多すぎる」0%、「少なすぎる」82.5%(33名)であった。希望時間数は7~8時間と答えている。

サブユニット看護過程の応用に関する意見として挙げられているものをまとめてみると表4のようになる。

意識調査の結果から、Written Patientを教材としたことやゼミナール形式で展開したことは効果的であったと評価しても良いと考えられる。しかし学生が指摘しているようにWritten Patientを教材とする場合には、データを追求するうえで限界がある。原則としてこの教材を作成する場合には、実際に患者を受け持ち、ありのままの状況をまとめることになっており、この原則を守るならばこのような問題も解決できるように思う。また、テーマ数を増やしてほしいという学生の意見には、積極的な取り組みが伺える。今後、対象と状況を考慮し、視聴覚教材をも加え作成してゆきたいと考えている。

## 5. 看護過程の応用と実践(V-3)

サブユニットの3は「看護過程の応用と実践」であり、Written Patientを中心に看護過程の各プロセスにそって展開した後に、実際の患者を受け持ち、アセスメント、計画立案、実践を行うユニットである。ねらいは疾患をもった患者の看護問題を認識し、個別化した看護を展開できる能力を養うことである。

このサブユニットにおける目標は下記の通りである。

### G. I. O

1. 成人期にある人の看護問題の発見、識別、問題解決に必要な基本的知識、技術、態度を養う。

### S. B. O

1. 対象の発達段階からの特性および疾病状況の特性から看護の情報が収集できる。
2. 情報を分析、統合し、看護問題を表現できる。
3. 看護問題解決のための目標を表現できる。
4. 目標達成のための具体的看護行為を表現できる。
5. 目標が達成されたかどうかを判断するための評価ポイントを列挙できる。

### 展開方法

内科系3グループ、外科系3グループを編成し、1グループの学生は7~8名と、インストラクター1名で構成される。学生は2名でペアを組み、インストラクターと相談の上、受持ち患者を決め、看護実践を通して目標を達成することをめざしている。期間は一週間、

実習日数4日間(総時間数19時間)の病棟演習が行なわれた。

学生には、記録の項目と実際に記録したモデルが配布された。この記録のモデルは、問題リスト、データベース、系統的レビュー、診察所見、検査所見、Sequence of Event、経過記録(S.O.A.P.で記録)、看護計画を含んでいる。この記録のモデルを参考に、学生は各自のノートに創意工夫を加え、看護過程を中心に記録し、毎回インストラクターに提出し、個別指導をうけた。また、学習を効果的にする目的で、受持患者の資料を作成し、看護過程を中心にグループ毎にカンファレンスを開催した。

このサブユニットで強調されている点は、看護の実践を通し、1人の実際の患者を中心に看護過程を展開することである。インストラクターは、看護場面を通し、情報の収集、情報の解釈・分析、看護問題の判別、計画立案、実践を中心に個別に指導を行なっている。行なった看護の評価に関しては、効果をみる為ある程度の期間も必要であり、ここでは看護実践の結果や患者の反応を記述し、客観的な評価ポイントを列挙するにとどめ、実際に評価までは行なっていない。

個別的な学習指導により、看護過程の各ステップを学生が一応一人で展開できることをめざし、このサブユニットは終了する。

この後に疾病をもつ成人期の人、および家族を対象に、看護問題を判別し、個別化した計画を立案し、実践、評価までを目標とした臨床実習が展開される。

## III 考察

成人看護学においては、成人期にある人および家族を対象に、看護問題を系統的に判別し、問題解決への援助活動ができることをめざし、教授目標が設定されている。

最初に述べたように、この目標を達成するために、まず、成人看護学全体をどのように構成するかが討議され、各ユニットごとにG.I.O、S.B.Oを明示した。また、各々の目標を達成するための教授-学習方法に関する検討がなされ、その結果として、インテグレーションユニットが設けられた。

このユニットに対する学生の反応は、ゼミナール形式あるいは病棟演習という学習方法が効果的であったことを示している。また、これらを通して、情報の解釈・分析が多角的な角度からなされるようになってきたと思われる。学生に対する評価は、インテグレーションユニットの最後に展開される病棟演習において個別になされ、学生にフィードバックされている。

最終段階である臨床実習に関しては、まだ客観的な評価が出されておらず、統計的に明示できないが、前年度までの学生と比較すると、実習の初期の段階から

問題リストを作成し、優先する看護問題に対する計画を立案し、計画に基づいて実践するようになっている。また、評価までのプロセスをふんで、フィードバックしながら実習を展開している。これらのことから、少なくとも、問題解決の思考過程は臨床実習の開始前に達成できていると思われる。しかし、残されている課題も多く、次のような点に関して検討を続け、改善してゆく必要があると考える。

1. **Written Patient** を中心とした教材の限界を、視聴覚教材の併用により解決すること。
2. 看護過程の応用のテーマは、対象の特性、状況の特徴をより効果的に組合せ、内容を充実してゆくこと。
3. 成人看護学における各ユニットの達成度の評価基準を客観化することなどである。

なお、昭和52年11月～53年3月にかけて、財団法人医療情報システム開発センターの御好意により、コンピューターを用いた教材開発の機会を得、成人看護学スタッフ全員でコンピューターによる看護過程学習プログラムを作成し、実験を終了した。昭和53年度にはこのプログラムを導入し、学生を2グループに分け従来の講義方法とCAI (Computer Assisted Instruction) システムを用いた教授-学習方法を実践し、比較することによりその教育効果を評価することを計画している。

#### おわりに

以上、昭和52年度の成人看護学の展開におけるインテグレーションユニットの試みについて、その考え方と方法を中心に述べた。

教材に関して検討する余地は残されているが、段階をふんだ進め方は効果的で、また **Written Patient** を用いた展開およびゼミナール形式による進め方は有効であると思われる。次回には、臨床実習をも含め、達成度を客観的に評価し、分析結果を報告したいと考えている。

#### 参考文献

- 1) Miller. G. E., *Teaching and Learning in Medical School, A Common Wealth Fund Book*, 1968.  
吉岡昭正訳, 医学における教授-学習, 篠原出版, 昭和52年1版。
- 2) Reilly. D. E., *Behavioral Objectives in Nursing: Evaluation of Learner Attainment*, Appleton Century Crofts, 1975
- 4) Tyler. R. W., *Basic Principle of Curriculum and Instruction-Syllabus for Education 305*, University of Chicago Press, 1960
- 3) Secor. J., *Patient Studies in Medical-Surgical Nursing*, J.B. Lippincott Company, 1967

#### 資料1: 成人看護学についての学生の意識調査の結果と考察

昭和52年度2年生に対して、成人看護学のI～Vのユニットが全て終了した時点で、無記名のアンケート方式による意識調査を行なった。学生数47名中回答者は41名(87%)で以後用いられる数字は、41名を100とした数字である。

質問内容は以下の通りである。

1. 時間数はどうであったか
  2. G I O, S B Oの明示は役に立ったか
  3. G I O, S B Oの達成感はどうか
  4. 教授法はどうであったか
  5. 課題の量はどうか
  6. ワークブックは活用したか(ないユニットもある)
- その他、ユニット毎に、意見や今後の希望も書き入れてもらった。

次に、ユニットI～IVまでのアンケート結果と考察を述べたいと思う。この部分は、基礎理論、一般原則論を主に講義によって教授している。

時間数について「丁度よい」と答えたものが、ユニット平均50.3%と過半数を占めている。「多い」は平均で8.2%、最高の耳鼻科、看護過程などでも25%以下である。一方「少ない」の平均は、35.5%であり、特に泌尿器、内分泌、外科治療、循環器などは85～50%と高い。

次にG I O, S B Oの明示について「役立った」と答えたものが平均81.6%と圧倒的多数を占めている。

一方G I O, S B Oの達成感をみてみると「達成できた」と答えた平均は、12.2%であり「ほぼできた」と答えた平均は、70.5%であり、82.7%は一応達成できたと答えている。尚、「できなかった」の平均は、17.2%であるが、これは、サブユニットによる差が大きく、泌尿器では66%、看護過程では34%を占めている。そこでG I O, S B Oの明示が役立ったか否かと、達成感の関係をみてみると「明示が役立たない」と回答の多かった泌尿器や看護過程は、いずれも達成感の最も低いものとなっている。G I O, S B Oの活用についての学生の意見であるが、「授業に即しているとわかりやすかった」とか「講義と直接一致していないと、見る気がしない」などの意見が多く主に学生は、講義の指標として、G I O, S B Oを活用していたものと思われる。学生の達成感とテストの成績の関係をみてみると、達成感の高い眼科、脳神経、皮膚科の平均点は高く、達成感の低い泌尿器、消化器、内分泌の平均点は低い。これより、学生の達成感、自分のテストの結果に、影響されたのではないかと想像される。

達成感と時間数の関係を見ると、抽象的概念の理解が必要とされる看護過程、人間関係、概論、教育的役割などは、達成感が高くはないが、時間数の不足の訴えはあまり多くない。しかし、これ以外では、達成感の少ないものは時間数も少ないと答えている。

教授法について「よかった」と答えた平均は、58%であるが、科目によって差のある結果がでた。運動器、眼科、循環器、脳神経などでは、90%以上が「よかった」と答え、人間関係、看護過程、健康のプロセスなどは、30%以下である。教授法が「悪かった」との回答は平均13%と低いが、看護過程や、人間関係では、約半数を占めている。

ここで教授法と達成感の関係をみてみると、教授法が「よかった」との回答が少なかったものは全て達成感も低い。一方教授法が「よかった」との回答が高いサブユニットの約半数は、達成感も高いが、循環器や外科治療は、達成感は低い。このサブユニットについて、時間数を中心にみてみると、両者とも時間数が少ないとの回答が多い。これより、両サブユニットは、教授法はよかったが、学習内容に比べ講義時間が少ないためと思われた。

## 資料2；病棟演習記録内容

### 演習前に学習して記載するもの

- 1.患者氏名
- 2.年齢
- 3.年齢的特性からみた一般的な発達課題
- 4.診断名（患者に説明されている病名）
- 5.疾病についての理解
  - 1)正常な構造と機能
  - 2)正常な機能を営むための条件
  - 3)病態生理について
- 6.徴候・症状
  - 1)客観的データとなるもの
  - 2)主観的データとなるもの
- 7.診断検査（外科治療を受ける患者の身体評価のため

の検査も含む)

- 1)一般的になされる形態的な変化を調べるための検査と異常所見
  - 2)機能的な変化を調べるための検査と異常所見
  - 3)その他（血液・尿・病理学的検査など）
- 8.一般的な治療
- 9.病気の悪化や治癒過程を評価するための一般的な観察ポイント

### 演習中に記載されるもの

- 1.患者について
  - 1)住所
  - 2)職業
  - 3)現病歴
  - 4)既往歴
  - 5)その他（習慣、特性、家族構成など）
- 2.病気状況及び入院が、この患者の発達課題にどのように影響しているか、また予測される危機はどんなことか。
- 3.患者の疾病の理解
  - 1)形態のおよびと機能異常
- 4.患者の徴候・症状
  - 1)客観的データ
  - 2)主観的データ（患者の訴え）
- 5.患者になされている診断検査
  - 1)形態的な変化を調べる検査と所見
  - 2)機能的な変化を調べる検査と所見
  - 3)その他
- 6.患者になされている治療とその目的
- 7.疾病によって患者の基本的ニーズが、どのように障害されているか、また今後起り得る障害はどんなものか。
- 8.患者の疾病状況や、治癒過程を評価するための観察ポイント
- 9.看護の原則（患者の望ましいゴールに達するために看護婦はどのように援助すべきか）
- 10.この患者の看護の必要性について

注1) Barrows, H.S., Tamblyn, R.M., Guide to the Development of Skills in Problem Base Learning and Clinical Reasoning, McMASTER UNIVERSITY.

注2) 1人の実際の患者の入院から退院までの経過にそって問題状況を中心に書かれている教材。

注3) 成人看護学のI～Vのユニットが全て終了した時点で無記名のアンケート方式による意識調査を行い、学生数47名回答数41名（87%）であった。この意識調査の結果と考察については資料①を参照。

（昭和53年3月31日受付）

## Integration Unit-Effective Teaching-Learning Method

Shun Takahashi, Ikuko Iwai, et al.

The adult nursing is presented to provide the students with the opportunity to get basic knowledge and to develop skills in applying the steps of the nursing process to the care of adult medical-surgical patients. To achieve the above goal, we established a new unit which was named "Integration" among the others as the framework of adult nursing.

The unit consisted of a seminar with the use of written patients made out from actual patients for a teaching-learning devise, and of practice in the inpatient-ward. After the term of the unit was completed a questionnaire was sent out to 44 students to obtain the information concerning their reactions to the integration unit. 41 students out of 44 filled out the questionnaire.

According to the result of this study, 35 students (90%) answered that the seminar using written patients was effective and 26 students (63%) answered that the practice in the inpatient ward was effective.

Using this teaching method, the learners achieved the objective of solving nursing problems with applying the problem solving approach by the end of the term of the unit and were well prepared for entering the next learning step of the clinical practice, unit VI.

At present, we have not yet found appropriate evaluation procedures in order to assess the meaning of the integration unit. There still remain several steps in this experiment to develop further into more effective teaching-learning method. They are as follows.

- 1) The use of audio-visual aids
- 2) An adequate teaching evaluation

The further study should be required in the future.